

シンポジウム 第Ⅲ部 パネルディスカッション

コーディネーター

大田 幸博（熊本県立装飾古墳館長）

パネラー

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉館長）

佐藤 信（東京大学大学院教授）

濱田 耕策（九州大学大学院教授）

司会 お待たせいたしました。それでは、準備が整いましたので、シンポジウムに移らせていただきます。ここからは装飾古墳館 大田幸博館長に進行をバトンタッチいたします。

大田 先生方から御熱心な発表がございました。とても示唆深い内容でしたが、時間の都合上、限られた時間内で非常に無理をなさったものと恐縮しております。そこで、言いたらなかった先生方もいらっしゃると思いますので、5分程度、追加がございましたら、お話しをいただきたいと思います。

先ずは岡田先生。先生からは、九州南部を統括していた鞠智城の役割がメインのお話しでしたが、その他に興味深い話題として「車路」の問題も取り上げていただきました。全体的に話し足りなかったところもあるうかと思いますが、特に「車路」について補足していただければ助かります。先生よろしくお願いいたします。

岡田 今、「車路」について補足を、というお話しがありました。したが、その前に一つ、申し上げたいことがあります。それは、なぜ文武天皇二年、六九八年に鞠智城が、大野城、基肆城といっしょに緋い収めたのか、ということですが、実は、濱田先生のお話しにも関連することで、先生からもそのお話しがありました。鞠智城の役割を考えるう



図1 コーディネーターの大田幸博氏

鞠智城が繕治されたのは、五月二十五日のことでした。補足したい話題は、その直前、四月十三日の記録と、その二年後の文武天皇四年、七〇〇年の記録でございます。

文武天皇二年、六九八年、四月十三日に、大和朝廷は、務広式文忌寸博士等八人を南島に派遣いたしました。これが覓国使と呼ばれる人たちです。その目的は、南島、つまり種子島や屋久島を大和朝廷に従属させるためでした。ところが、文武天皇四年、七〇〇年、六月三日、その覓国使が薩摩で妨害されるという事件が起きました。非常に興味深いのが鞠智城の修理

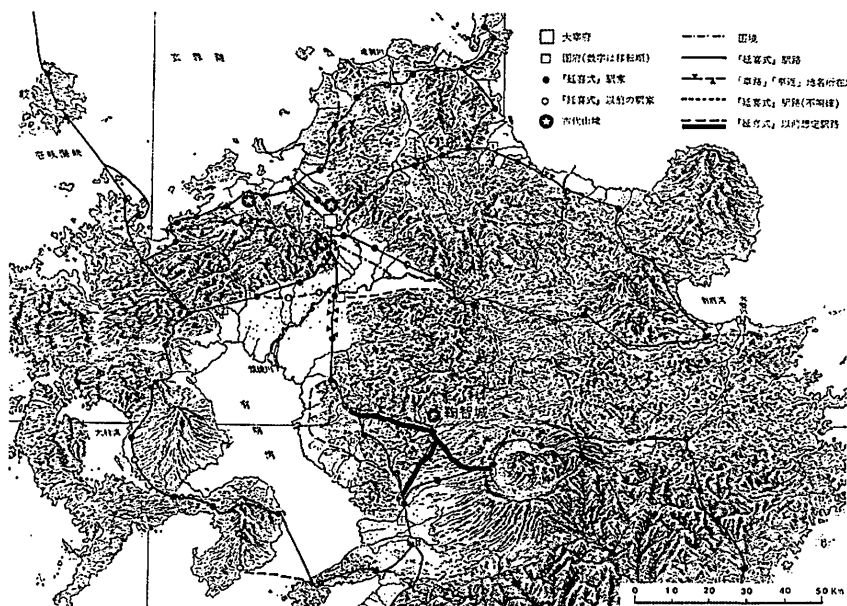


図3 古代西海道と「延喜式」以前想定駅路
(木下良 1983「西海道の古代官道について」『九州歴史資料館開館十周年記念
大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館 の挿図に加筆)

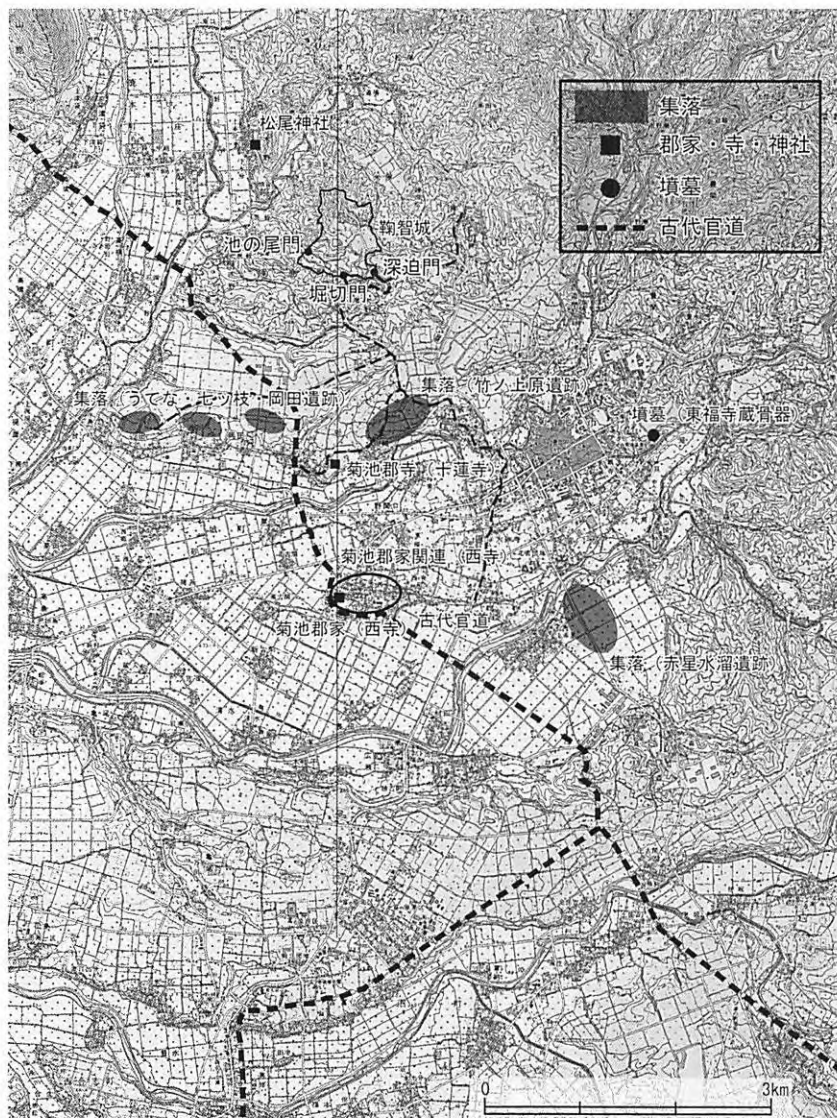


図4 鞠智城周辺の古代遺跡 (古代官道のルートについては鶴嶋俊彦 1997
「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第7号 による)

が、覓国使の南島への派遣とそれが妨害された事件とほぼ同時に行われた、ということです。つまり、鞠智城の七世紀の末頃の性格を表しているという記録ではないか、というふうに考えられるわけです。これは、濱田先生もそういった趣旨のことを述べられておりますので、まさにその通りだろうと思います。

次に、笹山先生の御講演の中でもすでに触れられていたことですが、西海道の問題です。すでに皆さん御承知のことと思いますが、この西海道は、九州全体を回っていた官道でありました。延喜式には、その関係で各地の駅家が記されています。現在、この駅家を結ぶルートが西海道だ、というふうに考えられておりまして、それがどこを通っているのかという研究が歴史地理を中心として行われております。また、考古学でもたまたまそのルートに沿う遺跡で道路の痕跡が発見され、西海道との関連が取り沙汰されております。



図5 堀切門跡発掘調査状況 軸くずり孔が穿たれている門礎石が見える

ところが、肥後国では、西海道とは違う道路が地名として点々と出てくる地域があります。それが山鹿郡内や菊池郡内です。「車路」という地名ですね。読み名では、「クルマジ（車路・車地）」とか「クルマジ」が訛つての「クルマジ↓クルマヂ↓クルママチ（車町）」というものです。日本の古代には、もともと人間が乗る車はございませんでした。そうは言いつても、「車路」と呼んでいますから、当時、何らかの車を使っていたと考えざるを得ないわけです。ですから、当時としますと、都を走っていた牛車であるとか、荷車ということになります。この「車路」という地名を追っていきますと、それが何と鞠智城に至るわけです。それも鞠智城の南、南門に当たる鞠智城の掘切門に至っていたと考えられます。つまり、鞠智城は南を向いていたわけですね。

そこで、この「車路」の行く先をみてみたいと思います。この「車路」は、鞠智城の付近で二手に分かれていたことがすでに分かっています。一つは、南に方角を変えて、肥後国府に行く道ですね。現在の熊本市へ行く道です。もう一つは東の方に分かれて、豊後国の南部、つまり今の大分県の南部を通って日向国に至る道です。

この鞠智城が築かれ、そして繕治された頃、大隅は、まだ日向国に属していました。また、薩摩国は、当初は唱更国、ハヤヒトコクと私は読んでいますのですけれども、この唱更国とされていますね。この唱更国が置かれるのは大宝二年、七〇二年のことでしたので、当然まだ無かったわけですね。そういう地域ですから、九州の南の方は、隼人の地であり、まだ倭の国に入っていないという段階だったのではないのでしょうか。その段階に鞠智城が築かれ、繕治されたわけです。しかも鞠智城は、南を向いています。鞠智城と九州南部との間に何か関連を窺わせてくれて、興

味深いものがあります。そんなことで、私は、鞠智城の南にある、車路、官道との関連で考えてみたわけです。以上です。

大田 今の岡田先生のお話しでございますが、鞠智城がなぜ南を向いているか、と従来から問題点が提起されておりました。白村江の戦いでの敗戦を受けての守りのためですと、当然北を向いていなければいけない、というような話しになります。その関係上ですね、車路との関係をここ十数年来取り出されておりますけれども、いろんな新資料が出ておりまして、先生の方から、そういった方面でのお話しを伺いました。

次に、佐藤先生にお願いしたいと思います。佐藤先生は、西海岸を含めた、九州の烽のネットワーク、あるいは八世紀、あるいは九世紀の鞠智城の性格について、非常に詳しくお話しいただきました。特に八世紀の大宰府との関係、肥後国司との関係、菊池郡との関係などのお話しをしていただきました。補足がございましたら、お願いいたします。

佐藤 他の先生方のお話しも含めて考えますと、鞠智城の役割というのは、大陸・半島との関係、つまり対外的な関係、あるいは南九州に向けての関係、あるいは南島に



図6 パネラーの佐藤信氏

向けての関係と多岐に亘っていることが想定されています。それと同時に、私がお話ししましたように、律令国家の中央政府との関係ですとか、あるいは大宰府との関係ですとか、あるいは肥後国府との、国司との関係ですとか、あるいは菊池郡の郡司など、地元との関係ですとかがあったのだらうと想定できます。つまり私が言いたいのは、その鞠智城の果たした機能が単質ではなくて、時代によって重層的といえますが、複合的といえますが、幅広い機能が展開していたことがあり得るのかな、ということです。それぞれの時代で、いろんな交流関係の中で、鞠智城の歴史が展開していたのではないかということこれから考えなくちゃいけないと強く感じております。

そこでお願いしたいのは、鞠智城の建物の変遷を具体的に整理していただきたい

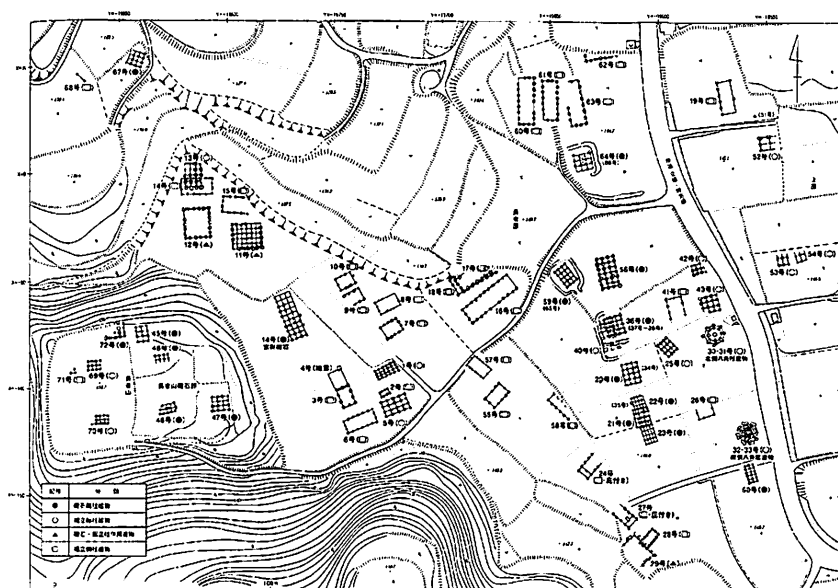


図7 長者原地区の建物検出状況

ということです。発掘調査の成果として、例えば倉庫群を大田先生は、四期に分けて考えられておられました。小形の掘立柱建物の時代から大形の掘立柱建物の時代になり、次に小形の礎石建物の時代から大形の礎石建物の時代になるというような変遷だったかと思います。つまり礎石建ちでもっとも立派な鞠智城の姿になるのは、具体的にいつの時代になってからかということです。また、最初の時期は、建物が小振りだったということになりますが、百済の技術をどういうふうに使ったのか、鞠智城の技術と百済の技術がどういう関係になるのかということです。このことは考えなくてはいけない、と強く実感しております。おそらく最初に、一番立派な鞠智城だったというイメージでは、ないのでしょね。今日のお話しによれば、むしろ段々と立派になっていくということがいえるようですね。

私たちが持っている鞠智城自体のイメージと、私たちが持っている日本古代史のイメージ、あるいは律令国家のイメージというのが、当然リンクしていくと思うのですが、そのことに関して、鞠智城がどういう研究成果、調査成果を発信できるかが問題になっていくのかなあ、と感じております。

大田 今、佐藤先生から御質問等がございましたので、建物の建て替えについて簡単にお答えします。鞠智城では七十二棟の建物跡が出ておりますが、たまたまある一つの調査区で、大形掘立柱建物、それから小形の掘立柱建物、それから小形の礎石建物、そして最後に大形の礎石建物という変遷を捉えることができました。この変遷ですが、最後の大形の礎石建物は、大きな礎石であります。地業が非常に雑で、礎石自体が傾くとか、あるいは火災にあっているとか、あまりしつかりした

ものではなさそうです。しかも、これはあくまでもたまたまの切り合い関係でございまして、それを鞠智城全体に当てはめることはできないと考えてもおります。この他、鞠智城の七十二棟の建物後を精査しますと、もっとしっかりした大形礎石建物があります。ですから、一概に四時期がそのまま鞠智城の変遷に当てはまらないのかもしれませんが。

また、冒頭説明をいたしました、建物が建っていた所が昭和四十二年の開田事業によって地山まで削られておりました。またそこが田圃や畑として利用されておりましたので、なかなか遺構の前後関係が掴めないところもありました。なかなか難しいところもありますが、佐藤先生からそういった御質問等がございましたので、もう少し私どもの方で調べたいと思います。

さらに、佐藤先生からは、非常にりっぱな成果が出ているわけですが、情報発信ができていないというご指摘もいただきました。これまた私たちの怠慢でもございます。とにかく今一生懸命、

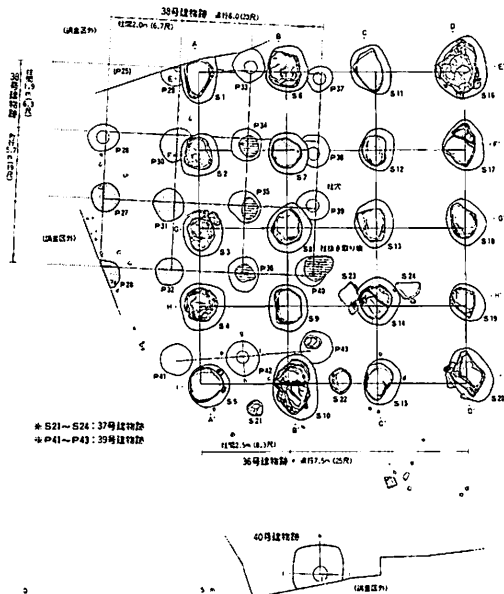


図8 建物跡の建て替え状況
36号～40号の建物跡が切り合っている。その変遷は、
40号→39号→38号→37号→36号。

PRに努めたいと考えております。

それでは、濱田先生、お願いします。

濱田 先ほどの岡田先生のお話しに関連しまして、補足をさせていただきます。例えば、兎国の使者、あるいは「其度感嶋通中国、於是始矣（その度感嶋の中国に通うことはより始まる）」という、記録にあるような大和政権に通う南島からの使節がいます。例えば、彼らの通行路にこの鞠智城が含まれていたり、あるいは肥後国の国衙や官道が彼らの通行路に当たっていたりするとすれば、それぞれの使節が都に上がって行くまでの間、日本の国の様子を見たりします。そこで彼らは、律令体制が整っていることを感じたりするかと思います。その反面、律令国家の威容といいますか、威風といいますか、そういった雰囲気を相手側に感知させるという機能が期待しているかとも思います。実は、鞠智城の豊かな建造物等々にも、そのことが言えるのかどうか、それが気になると思います。

と申しますのも、八世紀、日本から新羅国に遣わされた遣新羅使のことが思い浮かびます。当時、彼らがなかなか渡海しなかったケースがあったようです。それは、新羅が自国中心姿勢であったし、大和政権の方も自国中心主義であっ



図9 パネラーの濱田耕策氏

遣新羅使が新羅の都に行
くルートには、今の蔚山か
ら入りまして、蔚山広域市
北区の泉谷洞と慶州市外東
邑毛火里の境に関門城とい
う長城があります。この関
門城は、七二二年、統一新
羅が日本の侵攻に備えて築
いた、万里の長城のような

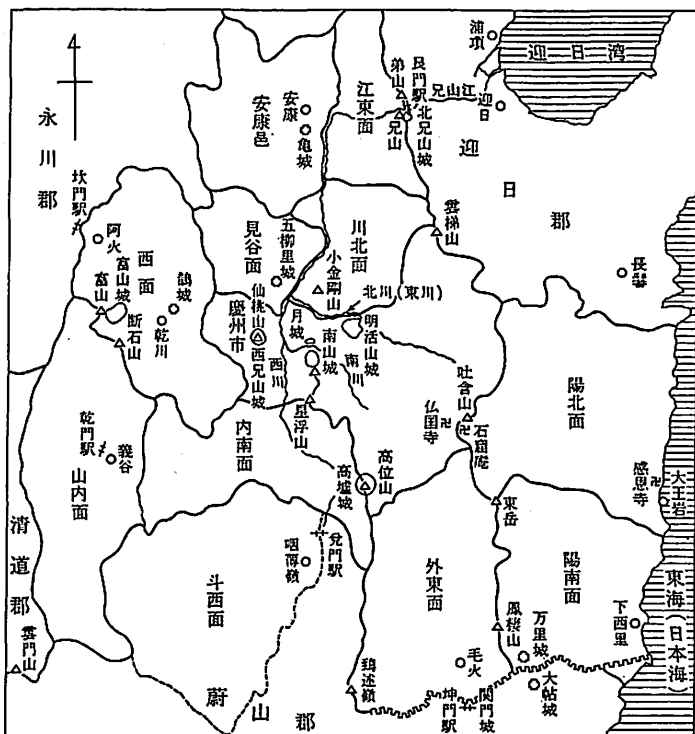


図 10 新羅王都（金城）周辺の山城配置状況
（井上秀雄 1981「遺跡分布からみた新羅の城郭」『新羅と日本古代文化』
吉川弘文館 第 4 図を転載）

関門で入国手続きを取り、そして新羅の都に入るわけです。その都に入りますと、北側に北兄山城、西側に富山城と西兄山城、東側に明活山城、南側に南山新城と、都を取り囲むように石造りの山城、石城が聳えていることが分かります。まさにそこが中国（中華）であるかのような感じを受けさせるわけです。

このように、覓国の使者、あるいは南島勢力を威武するという側面で、鞠智城の構築のあり様というのが考えられないのかですね。それがちよつと気になるところです。

もう一つは、今福岡に住んでいるながら、福岡に帰ると叱られそうですが、大宰府中心に考えるということの時々止めてみても良いのかな、ということです。地方中心で考えてみて、また大宰府中心に戻る、ということも大事じゃないかと、鞠智城を考えながら思った次第です。

（奈良国立文化財研究所・朝日新聞社「平城京展」所収）

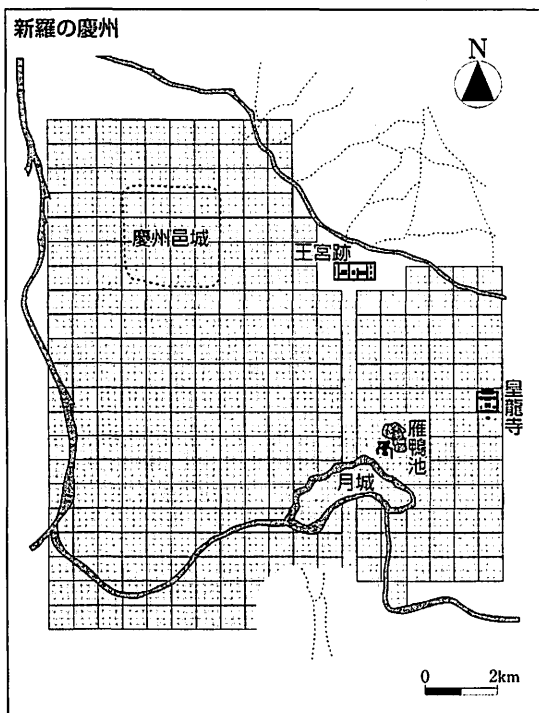


図 11 新羅王都（金城）

（岡田茂弘監修 2002 『復元するシリーズ② 古代の都を復元する』 学習研究社 より転載）

大田 先生方とは、シンポジウムの前にいろいろと打ち合わせをしました。その中で、鞠智城は、大原則は古代山城ですが、それが九世紀の後半まで残っていくということが話題になりました。やはり多面的な要素を時代的な変遷の中で考えなければ、説明がつかないのではないかと、ということになりました。

これまで、先生方のお話を伺ってきたわけでございます。そこで、時間が無く恐縮です、先生方に質問が来ております。

【質問二】

鞠智城は、大野城等との後方支援基地（武器・食料）としての山城なのか、それとも有明海を意識した城なのか。肥後国府は有明海を意識して変遷したと聞いています。というものです。この件につきまして、岡田先生、いかがでしょうか。

岡田 今の御質問の中の前段の方ですね。皆さんは、大野城の性格をご存じだと思って言わなかったのですが、大野城というのは、基本的には朝鮮の山城と同じものです。つまり、敵に攻撃された時に逃げ込む所なのです。この逃げ込み城という考え方は李進熙さんが書いておられます。要するに、戦時下、敵に集落を攻撃されますと、一家を挙げてみんな山へ逃



図 12 パネラーの岡田茂弘氏

げ込むわけですね。その逃げ込む所が城だという性格を持っているわけです。

大宰府の周辺には、背後に大野城があったり、南に基肄城があったり、東に宮地嶽があったりします。ところで、この宮地嶽は、新しく発見された山城でして、文献には全く出てきませんから、定義からいうと神籠石になるのでしょうか。大宰府周辺の人々は、いざ有事の際には、この三つの城に分かれて多分逃げ込んでいたのではないかと考えられます。朝鮮式山城というものは、当然、そういう性格ですから、それらの支援のために鞠智城があるということは、ちよつと考えられないのではないのでしょうか。ただし、大宰府のために鞠智城が存在するということは考えられると思いますよ。

もう一つは、大野城、基肄城などでは武器倉や米倉があることは分かっているのですが、行政的な施設があったというのは今のところ分かっていません。これは調査が行き届かないから分からないという面も確かにあるとは思いますが、その一方で、そうではないという面もあるのではないかと考えております。先ほど鞠智城を紹介したDVDで皆さん御覧になられたと思います。それを観ますと、実に広々とした平坦面が鞠智城にあることがお分かりになったと思います。実は、あれに匹敵するような平坦面が大野城にも基肄城にもございません。非常に深い谷が中を通っているわけで、その出口のところに水門や城壁があるわけです。ですから山の斜面に狭い平坦面をこしらえて、そこに倉が並んでいる、というのが大野城や基肄城の内部構造なのです。

これに対して鞠智城では、広々とした所に役所的な掘立柱建物が並んでいるわけです。これは一体何のためだ、と申しますと、私は考古学者ですから、関連する他の遺跡から考えることにし



鞠智城は、大野城や基肆城とは異なって中央部に広い平坦地（長者原）がある。この平坦地一帯から 72 棟の建物跡が検出されている。

ています。まあそれで考えようと思いますが、残念ながら九州の古代山城の中には、類例がありません。そこで、その類例を敢えて求めたのが東北の古代城柵だったわけです。そういう発想から始めたわけです。

東北の古代城柵について、時間の関係で説明を外しましたので、ここで少し説明をさせていただきますと思います。例えば多賀城というの

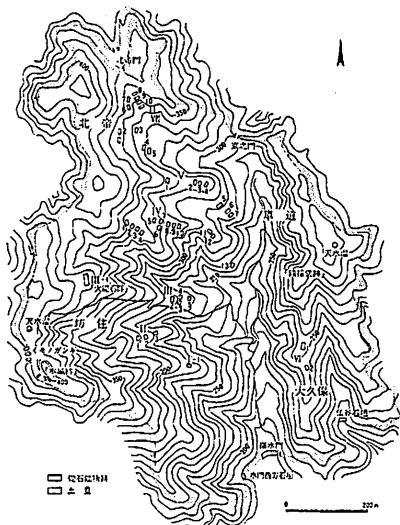


図 13 鞠智城（上）・基肆城（下左）・大野城（下右）

が宮城県にあります。これは陸奥国の国府の所在地です。それから九世紀になりますが、胆沢城というのが岩手県にあります。ここは、坂上田村麻呂が築いた城で、これは鎮守府が入っていた城です。つまり、両方とも行政機関が入る城です。この特徴は、秋田城も同じでありまして、秋田城もある時期には、出羽国の国府が入っていました。東北では、こういう行政機関の入る城が築かれていたのです。

ところで、九州の古代山城の中では、鞠智城がどうも行政機能的な施設があるらしいのです。

まだ半分しか

掘っていません

ので、分らない

のですが、お

そらく全部掘れ

ばこのことを実

証できると思ひ

ます。ただし、

後の半分は農地

の中に入ってい

ますし、ど真ん

中を道路が通っ

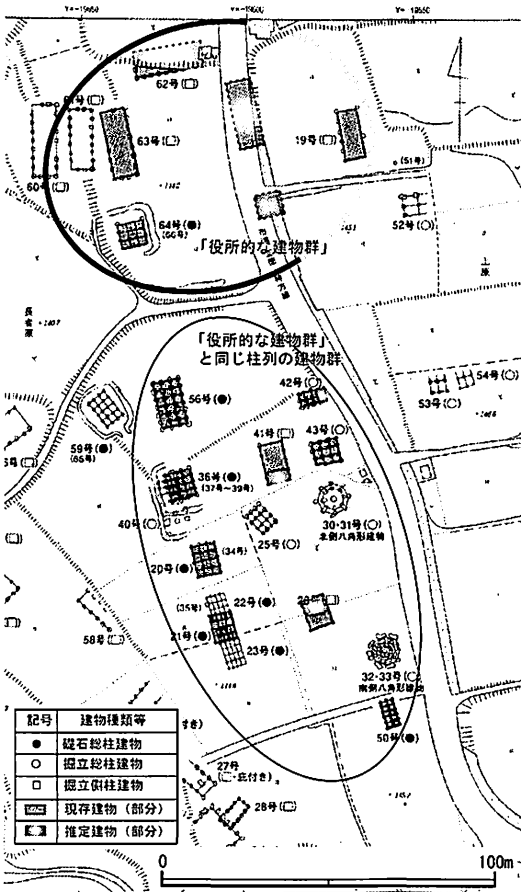


図 14 「役所的な建物群」(管理棟の建物群)とその周辺の建物群

ていますので、残念ながらちよつと掘りようがないらしいのですが。

このようなことから考えますと、やっぱり九州の古代山城の中だけで鞠智城の役割を考えたのでは、解決のできない問題があるのではないか、と思うわけです。

そこで、「鞠智城に行政機関的な施設が入っていたのは、何のためだ」というのが問題になるわけです。それを解決するものに、幾つかの検討課題がございます。一つは文武天皇二年の、先ほど申し上げたような南島との関係がございます。またもう一つは南島との間に実は隼人がいまして、覓国使が南島に行くのを妨害している隼人との関係がございます。大宝律令ができた直後に薩摩で反乱が occurred しました。大和朝廷はそれを制圧するなかで、後の薩摩国である唱更国を設置しました。その時、九州南部の、政治的な、律令国家の施策の拠点になったのが鞠智城だったのではないだろうか、と考えているわけです。

東北では、多賀城の北側に胆沢城が築かれますと、それまで多賀城にあった鎮守府が胆沢城に移されました。なぜ移されたかと申しますと、それまで蝦夷の土地であった所を本格的に開発し、律令国家体制に組み入れるためです。律令国家体制に組み入れるための行政的な中枢機関が胆沢城に移された訳ですね。

それと同じようなことが九州でもあったのではないのでしょうか。九州南部を行政的に治めるのは、おそらく大宰府が中心だったはずですが、その出先機関である鞠智城が役割の大きな部分を担っていたのではないか、と考えているわけです。

大田 ありがとうございます。考古学的な立場からの岡田先生のお話でした。

濱田先生、朝鮮古代史の御専門の立場で、この件に関していかがでしょうか。

濱田 私は、鞠智城の役割を考える場合、まず朝鮮式山城の機能を考える必要があると考えています。私も若い頃はそう思っていたのですが、日本では、朝鮮式山城は逃げ城とよく言われます。しかし、それだけでは物足りないところがあります。最近、私は、敵を引き付け攻撃する、要は敵を引き付けるための山城というふうに考えるようになりました。もちろん一旦逃げるのは逃げますが、敵がやってきた後に有利な立場で戦況を展開するために、上がってきた敵に対して攻撃を仕掛けるのではないかと考えております。例えば、城壁の石を上から落としたのではなからうか、と思うくらいです。敵を引き付けて、そして反撃する、そういう性格だろうと思っています。ただし、鞠智城は、それには全く当てはまらないようですね。

岡田先生のお話は、さすが多賀城に長く勤められて、東北の城柵の知識といましようか、現場を踏まれた上での見解で、「なるほどな」と思いながら、先生のご説明を聞いておりました。

大田 それでは、佐藤先生、七世紀の大和政権と地域首長との関係について質問が来ております。

【質問二】

大和政権は、九州・関東などの地方首長に対して、海外出兵を指令していたのか、それとも地方首長の協力を得るというスタンスだったのか。

というものです。佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤 六世紀には、地方豪族は国造というかたちで掌握されていきました。もともと倭の大王と地方豪族との間には、同盟的な関係があったと考えられます。それがしだいに支配・従属の関係に

皇大いに悦び、此の邑を名づけて二万郷といふ。」というように、近辺の兵士を動員するということをやっていたようで、一つの村から二万人の兵士が動員できたので、「二万（邇磨）郷」という郷の名前ができたということが記されています。

その後、伊予国の、今の道後温泉付近と考えられます、熟田津に三ヶ月か四ヶ月か滞在しています。私は、おそらくその間に伊予の地方豪族を初めとした、四国の地方豪族を動員したのだろうと思われます。実際、伊予国の風速郡の物部薬という豪族が参加した記録が『日本書紀』にあります。それから慶雲四年、七〇七年に讃岐郡の那賀郡の錦部刀良が抑留先の唐から四十四年ぶりに帰還した、という記録が『続日本紀』にありますように、讃岐の地方豪族も参戦したことが分かります。

おそらくその参戦の仕方については、筑紫国



図 16 パネルディスカッションの一場面

の上陽畔郡の相伴部博麻の記録からある程度類推ができます。その中に筑紫君薩夜麻という、君という姓を持つ、筑紫君磐井の末裔に当たる有力な地方豪族の名前が見られます。そんな有力な地方豪族の配下で相伴部博麻のような人たちが参戦していることが窺えるのです。つまり、百済復興に向けて参戦した倭の軍勢は、実体としては地方の豪族の軍を束ねたものだったということが言えそうなのです。

要するに、大王との従属的な関係で参戦した場合もあったでしょうし、動員されて参戦した場合も多かったのではないのかなと思います。

実は、これが倭の敗北の一因だったのかもしれない。唐の軍勢は、律令軍制の下で整然と秩序付けられていました。今風にいえば、師団の下に連隊があつて、大隊があつて、中

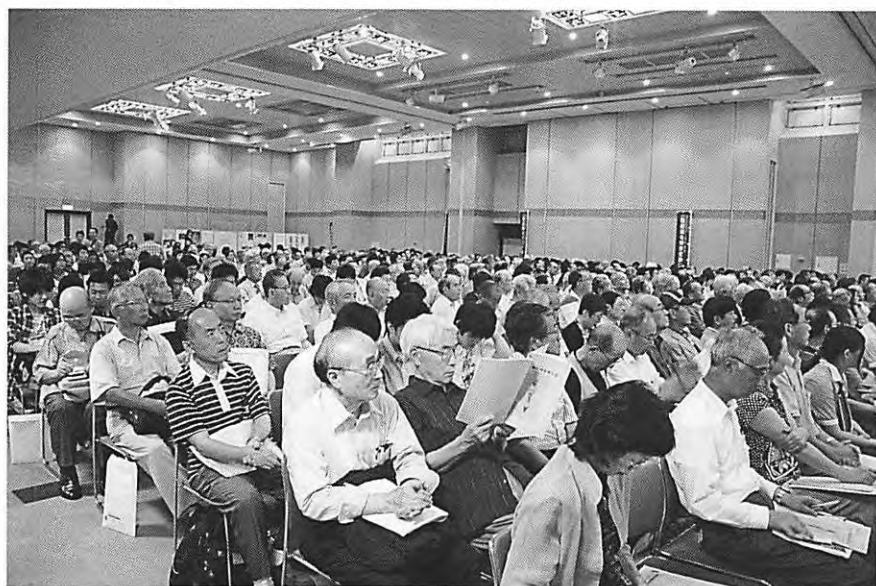


図 17 シンポジウム会場の様子

隊があつて、小隊があるというような、指揮命令系統がはっきりした組織でした。こうした整然とした軍勢に、「我先に進んでいけばどうになるだろう」みたいに猪突猛進で突っ走った寄せ集め軍隊では、最初から敗北がみえていたのではないか、という気がしなくもありません。

白村江の戦いの敗戦から日本列島の各地に戻ってきた、そんな地方豪族は、そのことを身にしみて分かったのかもしれません。そんな彼らの体験が、中央集権的な国家体制を築く上で生きてきたのではないでしょうか。律令制的な官僚制を日本列島で実現するに当たって、白村江の戦いから帰還した地方豪族は、大きな影響を与えただろうと考えております。

大田 ありがとうございます。白村江の戦いから戻ってきてからの地方豪族の働きが中央集権的な国家体制の成り立ちに繋がっていったのではないか、という非常に興味あるお話しでございました。もっともつと先生方にお話しを伺いたいのですが、時間ももうあと残り僅かとなりました。最後に、先生方から鞠智城の魅力と申しますか、少しアピールをしていただきたいと思います。

岡田先生、よろしく願ひいたします。

岡田 すでに私の発表の中でお話しをしたわけですが、すぐ直前に濱田先生から朝鮮の山城というのは、逃げ込みだけではないといったお話しがありました。早々と修正をしなければいけないかもしれませんね。

大野城も基肄城も、どちらも国の特別史跡になっております。今までは鞠智城は、すでに特別史跡になっている大野城や基肄城と同じだ、同じだということを盛んに言ってきました。しかし考えてみますと、同じでない部分があるわけです。同じでない部分こそ、この鞠智城の特性だと

いうふうに、私は今日いろいろと申し上げたわけです。特性の一つは南を向いているということです。南を向くための、つまり大宰府が南を経営するための拠点として、鞠智城が造られたと考えられるわけです。しかも、二百年の間、城が維持されています。

最初は、大宰府防衛のためだったかもしれません。それが七世紀の末には、違った意味を持ってきたのではないかと思います。文武二年、南島の経営が必要な時に、鞠智城が修理されたという事は、もうすでに変質していたからだろうと考えられます。さらに大隅国や、後の薩摩国である唱更国が作られる段階では、さらに変わった可能性があります。大伴旅人が大隅の隼人の反乱を制圧した時の記録には、残念ながら鞠智城はまったく出てきませんが、おそらく鞠智城を経由していたと私は考えているわけです。そういう点で、単なる逃げ込み城とは違う要素を鞠智城は持っていた、と考えたわけです。今こそ、その研究をすべきだろうと思います。

と同時に、「車路」といわれている道路跡の発掘は、熊本県では全く行われていないですね。やはり鞠智城の中だけ掘っているだけでは分からないわけです。鞠智城に至る道路の痕跡がいつまであったのか、いつ頃に無くなったのか、というようなことが、道路跡を発掘すれば分かってきます。鞠智城の性格を考える上では、これが一つの大きな要素になるだろう、と思います。また、鞠智城を経由する道路を考えますと、後の延喜式の官道、南北に走る官道はまだ無かったはずですから、肥後国府から大宰府に行くためには、鞠智城を経由しなければなりません。そういうことも考えて、熊本県内の古代をぜひ研究していただきたいと思います。その手掛かりが実は鞠智城にあるということ、これが魅力だと申し上げたいと思います。

大田 ありがとうございます。大野城や基肄城と同じでないところが鞠智城の特性であるということでした。また、「車路」を調査しなさい、という先輩としての厳しい命令がございました。頑張ります。

大田 佐藤先生、お願いいたします。

佐藤 今の岡田先生と同じようなことになってしまいかもかもしれませんが、コメントさせていただきたいと思います。

鞠智城の性格、あるいは構造自身もおそらく性格の違いとともに変わっていった面があるのだろうと思います。鞠智城の対外的な関係、あるいは南九州との関係を初めとして、鞠智城が果たした機能というものが重層的、複合的にあったと思います。その中のどれが一番重要な機能になったかということになるわけですが、それは時代と共に変遷した可能性があります。このことが推定されるというのも、私自身としては面白いと思いました。それは、鞠智城が果たした機能の重層性、複合性が、単に鞠智城だけの歴史ではなくて、日本列島の歴史全体と密接に係わっている、と考えるからです。また、律令国家の形成の歴史やその後の歴史とも密接に結び付いているということが、鞠智城の機能の重層性や複合性の研究が進めば、さらに明らかになってくるだろう、と考えるからです。

私は先ほどちょっと間違えて、「小形の掘立柱建物の時代から大形の掘立柱建物の時代になって、小形の礎石建物の時代から大形の礎石建物の時代になる」というようなことを申しました。これは間違いで、最初に一番大きな掘立柱建物で、その次が小さな掘立柱建物で、そして小さな礎石

建ての建物の時期から大きな礎石建ての建物という変遷が正しいということですね。その中で大田先生からは、ただ大きいからといって、構造的に立派であるとは限らない、というお話しがありました。

そこで知りたいことがあります。例えば、白村江の戦いの敗戦直後ぐらいに造られて、六九八年に大宰府をして修理させたのは、どの時期の建物跡に当たるのか、ということですね。また、「不動倉十一字火。」という、不動倉が十一棟焼けたという八五八年の記事が『日本文徳天皇実録』にありますね。その焼けたのは、どの時期の建物なのか、ということも知りたいですね。それぞれの数少ない文献で分かる時期と、考古学的な成果を付き合わせていけば、今先ほど私が面白いと思った鞠智城の変遷の中に、建物の変遷が具体的に位置付けられるだろう、と思います。そうしますと、さらにその歴史像というものが明らかに becoming いくのではないのかな、と思います。

それから、私ども日本史、古代史だけではなくて、考古学の先生もおられますし、朝鮮史の先生もおられます。それから今日お話しのアった歴史地理学の、古代道路の研究の方もいらっしやいます。金銅仏が、菩薩立像が出てくれば、美術史の研究対象でもあります。ということで、総



図 18 鞠智城跡で採集される炭化米

合的な研究対象として鞠智城を位置づけられるのではないだろうか。私がおそらく地元の人間であつたならば、「鞠智城」学というような言葉で表現するかもしれません。そんな鞠智城は総合的な研究対象に相応しい古代山城である、と私は言えるのではないかと思っております。

大田 佐藤先生、ちよつと言葉足らずで申し訳ございました。ただ大きいからといって、構造的に立派であるとは限らない、と申しましたのは、最後の大形礎石建物を引き合いに出したものでした。第Ⅰ期の大形掘立柱建物というのは、しっかりした建物だというふうに認識をしております。すみませんでした。

佐藤 はいはい。

大田 私は、『続日本紀』に初めて出てきま



図 19 百濟系菩薩立像の出土状況

す修理が非常に大規模な改築である、という認識をずっと持っておりまして。けれども、それがどうも修理ということじゃないのではないか、というふうなことも、発掘の資料整理の中では出てきております。本当に佐藤先生には、いろいろ今後の課題もたくさん頂きましたので、頑張りたいと思います。

それから、最後に濱田先生、笹山先生もお書きになっています、九世紀の新羅との関係とか、海賊関係とかありましたね。それを含めて、先生の鞠智城に対する思いというのをお願いいたします。

濱田 確かに、鞠智城は、大野城、金田城、基肄城に比べても、まだ特別史跡になってないというのはちょっと不思議に思います。基肄城は、ほとんど調査は進んでいないと思います。それに比べると、鞠智城の調査の意義ははるかに大きいと思います。

佐藤先生、岡田先生と重なりますが、鞠智城の始まりはやはり百済の白村江の戦い以後の防衛体制だったと思います。この点は、大野城、金田城、基肄城と同じだろうと思います。そして、他の城と決定的に違うのは、二百年間も活用されてきた、という点だろうと思います。生まれは百済式、百済人による大宰府防衛網の中の一環として造られたわけですが、やはり南方勢力のこともあり、あるいは九州の官道との関係もあって律令体制下の地方組織として朝鮮式山城が変化しつつ活用されたのではないのでしょうか。鞠智城が二百年間の歴史を持っているというのは、他のものと引けを取らないというか、それ以上のものだということを教えてくれているように感じます。

最後に、私が以前お話しした話題を、ここで披露させていただきたいと思います。「鞠智」というのは、初出の『続日本紀』の古訓では「くくち」と訓でいますが、百済語音では、おそらく韓国語音では「Kukchi」（クックチ）ですが、百済人の名に由来する名ではないか、と思っております。これを聞いていた韓国の方が「クックチ」というのは「国の地」、「我らの土地」だと、そういう意味だと提案しました。亡命者たちがここへやってきて、そしてここに安住の地を設けたのではないか、ということとです。「国の地」、これも発音は、「クックチ」なのです。しかし、古代において、そういう表現はしないだろうと思います。「智」は新羅や百済では人名の末尾に付ける文字です。この件は「クックチ」の由来としてもう少し追求してみたいと考えております。

大田 時間が参りました。笹山先生、岡田先生、

図 20 閉会



佐藤先生、濱田先生、ありがとうございました。また、今日はたくさん多くの方に御来場いただきましてありがとうございます。これで、鞠智城の知名度も上がったかと思えます。今後ともよろしくお願いいたします。